

産業春秋

題字 今井 敬氏

マテリアルトレーディングカンパニー社長

小滝 秀明



17年間のロンドン生活より帰国してから3年が過ぎたが、わが国社会のマナーの低下にはとても驚いた。優先席でさえ先を争って座り、人に譲る気などまさに毛頭ない、中年以下の世代を見るのは悲しい。

「決して生活は豊かではないが、礼儀作法が立派な国、日本」と西洋人に言われてきた、世界に誇るべきわが国の伝統が廃れていると感ずるのは、私だけではないと思いたい。

「人生は習慣の織物」(スイスの哲人・アミエル)であるならば、このような喜

隣有り

ばしくない風景に日々接する限り、国民全体がそれを当たり前とする社会を造ってしまっても不思議ではない。

残念ながら戦後昭和33年まで修身・道徳の教えが10年間途絶えたことが、本来なら世代につなぐべきものが抜け落ちてしまった大きな理由であろう。道徳教育が再開された昭和34年に生まれた小生ではあるが、きつと戦前世代が学んだ修身科ほどは重要に扱われなかった道徳の時間に、何を学んだという記憶がない。

核家族化が進んだわが国において、子供たちがあいさつや礼儀といった基本的な徳性を身に付けず、受験用の知性だけを重視する親から育っているとすら、「自分はダメな人間だ」と思っている中学・高校生が今や80%に達するという統計も少なくない。

英国に生活して痛感したのは、英語を話して生活するならば日本人であれ誰であれ特別扱いはされず、フェアに判断してくれること。弱きを助けるジェントルマンシップに誇りを持っている。困難や迷惑に際しての彼らの助けには、どれだけ救われたかわからない。時に彼らのプライドは眩しく嫉妬したものだ。

きつと武士道や神道を大切にすわが国も、同様であつたに違いない。自分が外国人の立場で見ると、良い意味で無視される居心地の良さがある反面、試験にあつては言い様のない寂しさや自己責任の怖さとも折り合いをつけなければならぬ。実に多くを学び英

国の強さを実感したものだ。

企業人としては厳しさを増す経済活動の中で勝ち残ることも必要なのだが、わが国の良き国民としてはあえて「おもてなしの心」などと言わずとも、お互いにしてもらってうれしいことを、無意識にして差し上げるのが日本人であることを忘れてはなるまい。とかく利や損得が判断基準になりやすい現代社会であるが、もっと大きな人間として徳を積むことの重要性を日々感じている。

「徳は孤ならず、必ず隣有り(論語)」

今の自分もどなたかのおかげ。きつと誰かは見てくれている。

いつも謙虚な心で過ごそう。きつと共感してくださる人がいるはずだから。